津田青楓

漱石と十弟子

つ だ せい ふう
津田青楓
明治13年9月京都に生る
関西美術学院卒，日本画家
著書に「老画家の一生」「春秋九十五年」「寅彦と三重吉」等
現住所　東京都杉並区高井戸西 1—33—20

漱石と十弟子　　定価 980 円

昭和49年7月20日　印刷
昭和49年7月25日　発行

著　者　津田青楓
発行者　本田優章
発行所　株式会社 芸　艸　堂
東京都文京区湯島 1の1の9
電話　東京 (253) 2028
京都市中京区寺町二条南
電話　京都 (231) 3613

本文印刷　猪瀬印刷所
製　　本　丸山製本所

0092-1008-0512

漱石と十弟子

津田青楓

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

新序文 9
漱石と十弟子 17
形がさきか色がさきか 21
青年画家の過去 24
老松町に住みて 29
瓢箪を持ちまわる 35
瓢箪を愛する 38
貧乏徳利の論争 47
訪ねて来た漱石 51
早稲田派の若手 60
ソクラテスの女房

源兵衛の散歩　67
おでん屋　72
漱石先生の油絵　76
へんちくりんな画　83
漱石先生の日本画　87
百鬼園のビール代　93
巴里からの消息　116
アンデパンダン　128
女の話　131
借金　138
岩波と桁平　142
三重吉と草平君　148
漱石先生の書　155
寺田さんと能成君　160

小宮と野上 166
山房の漱石先生 173
狂人といはれる漱石 186
ついせき迫害 192
木屋町の漱石 200
老妓金ちやん 203
津田兄弟 210
素人芸術論 216
お内儀さんとお梅さん 220
漱石の病気 239
虎の尻ぽをふむ 245
春の光をたよりに 255
跋文

新序文

津田青楓

殺伐とした戦争がいつ果てるとも知れず、人々は食糧あさりで、うんざりしている時代にミズリー号というアメリカの軍艦の上で、日本側代表に重光さんが乗り込んで終戦の調印を目出度くすまされたので人々はホッとした。そして戦争以外の読物を求める心は喉の渇いている時に一滴の水を飲むように文学的読物を求めてやまなかった。

私の娘婿Hは丁度銀座裏の陋屋で細々と出版業をやっていた。私は閑な時チョクチョク彼の店へ出かけた。

「お父さん何んぞ面白い書きおろしの読物を十日か二週間位の間に書いて呉れませんか」と頼まれた。私も何をするかという腹がきまっていない時だったので『漱石と十弟子』という普遍的な題目を考えつき、一気呵成に書きあげた。幸に売れゆきもよく皆が面白い〳〵と賛辞を呈してくれた。此の度縁あって芸艸堂さんか新装をこらして再版して下さることになった。

昭和四十九年七月一日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

漱石と十弟子

蕉門の十哲といふ絵を見たことがある。芭蕉のお弟子十人を蕪村が俳画風にかいたものなのだ。

私は大正七年ある人の主催て現代俳画展なるものの催のあつたとき、慫慂されたので、蕪村にならつて漱石と十弟子を思ひついて、二曲屏風半双に描いて出陳した。

それはいい工合に今度の空襲で灰になつてしまつた。当時は生存中の十人を一人々々写生し張りきつて描いた。それにもかかはらず後になつてみると随分未熟で見られなかつた。機を見てかき直しませうと、当時の持主に約束してゐたか、其の後戦争が勃発して持主の家も什器も焼けてしまつた。私は安心した。

さうは言つても、今その画の写真をとり出して見ると、漱石在世中長い間木曜日ごとにみなが集つた漱石出房の様子が髣髴として浮びあがつてくることと、今一つには画中に按配された十人のお弟子達の若かりしころが思ひ出される点において、なつかしい記念品てあつた。

画中の十弟子とは、安倍能成、寺田寅彦、小宮豊隆、阿部次郎、森田草平、野上臼川、赤木桁平、岩波茂雄、松根東洋城、鈴木三重吉の十氏なのだ。

和辻哲郎君なんかも、当然十指のなかに入るべき筈の人だが、十一弟子といふのも変なものだし、他とふりかへるにしても、どれもこれも描く上には特異の存在で、どの首をちよんぎつて他とさしかへるべきか途方にくれた。

赤木桁平とか岩波茂雄君とかは当時新参の方だつたから当然和辻君とさしかへるのが順当だつたかも知れないが、実は岩波氏の顔も、桁平氏の顔も画家から言ふと捨てがたい珍品なのだ。岩波ときたら禅月大師十六羅漢像の、なかからぬけ出した一人の羅漢像のやうて、画中の白眉なんだ。線の太い大形な羅漢のとなりに、これは又貧弱な色の青白い、当時大学を出たてのほや〳〵の法学士、赤木桁平君は、そのころのインテリゲンチャの風采を代表してゐるかに見える。

それが、隅つこの方て岩波が本を見てゐると桁平が首をのばして、その本をのぞき込んてゐる。その顔の対照が面白いからこの二人はやめられないのだ。岩波はそのころ女学校の先生をやめて、神田にケチくさい古本屋の店を出してゐた。それか漱石ものを手はじめに出版をぼちぼちやり出し、仲間の学者連のものをちらほら出してゐるうちに、変り種の本屋としての老舗となり、こつちの知らぬまに多額納税者とやら貴族院議員とやらになつてゐた。趣味のない男だから岩波本か

世間に出るやうになつてから、本の装幀はカチカチになつてしまつた。

桁平は、近松秋江や徳田秋声や田山花袋なぞの自然主義文学が癪だといつて、『遊蕩文学撲滅論』を書いて、文壇をさはがせた。支那戦争が段々と英米戦争に発展せんとする段階に突入するころから、どこで学んだのか一ぱしの海軍通になり、

「日本の海軍は無敵だよ、イギリスとアメリカとをむかうにまはしたつて毅然たるものだよ。」

そんな元気で遂に『アメリカ恐るるに足らず』といふ一書を発表して軍国主義者のおさき棒を勤めた。終戦後国会議員の責任が追求された時、真先きに辞任してひつ込んでしまつたのは賢明だつた。

桁平君は議論好きて喋り出したらとめようがない。彼の口の構造は特別製のやうだつた。政治であれ、教育であれ、芸術であれ、文学であれ、軍事であれ、哲学であれ、なんでもかんでも彼の議論の対象にならぬものはなかつた。桁平君の口辺には今はカビが生えてウジ虫でもわいてゐることだらう。

おん大漱石大明神は画の中心に頑張つてござる。桐の胴丸火鉢に二つの掌で顎をささへて、お弟子達が今にどんな痛快な発言をするだらうと上機嫌てまちうけてゐられる。漱石のアバタと色の黒いのは画には出てゐない。

漱石のすぐ隣には寺田寅彦が背広で片膝を立ててそれをかかへている。画中の寺田さんは若い。「先生、そんなにもらうことが好きなら僕はゲンナマを持つてきませうか。」と小さな声でつぶやいて、ペロリと舌のさきを出し、嬉しそうに笑ふ。寺田さんの皮肉には漱石も一寸まゐることがある。

その隣の安倍君は首をうなだれて、和服で座つてゐるが、眼が落ちくぼんで陰気くさい。どうみても貧乏な哲学者だ。三十年後の今日は、白髪童顔で福々しく、文部大臣として閣議に列席しても他の大臣諸公に比してその堂々たる貫禄は決してひけをとらない。野にある時は大きなことを言つてゐる人間でも、一度大臣となると急に人気とりのことを言つたり、大衆に媚びるやうな言説を吐く者が存外多いが、同君は大臣中いつても自説をまげずにアメリカさんに対しても教組に対しても、正々堂々と思ふところをまげずに貫ぬいてきたのは我々年配者をよろこばせてくれた。

同君はいつか、漱石遺家族のなんだつたかお祝儀ごとの席上、家族に対し一応の苦言を呈する前に、

「私は漱石山房に長い間出入りしましたが、いつも堂々と玄関からばかし出入りして一度も裏口やお勝手から出入りしたことはありません。」

さう言ひ放つた。

玄関からばかし出入りしてゐる者は能成君にかぎつたことてはない。三重吉、小宮、森田といふ人達以外は概して玄関党ばかしだつた。しかし玄関党と勝手口党とを意識して直言するところに、大臣にてもなれる資格がひそんてゐた。

十弟子中社会的に最高の位置についた者は能成君が一番だ。今では貴族院議員て憲法審議会委員長て、学習院々長さんで帝室博物館々長て大へんだ。冥途から漱石を電話て呼び出して意見をきいてみると面白い。学習院と博物館はいいが、文部大臣なんかよせと言つた。

その隣には松根東洋城君が黒羽二重の紋付き羽織で仙台平かなんかの袴て、野人仲間には鶏群の鶴のやうにお行儀よくナマズヒゲをピンと立てて、いかにも宮内省事務官らしい。今てこそ宮内省に共産党が赤旗を立てて押しよせ、天皇にあはせろとかなんとか、だだをこねて座り込み戦術をやるやうな世の中になつたが、昔の宮内省は全くの雲の上で我々素町人が口にするさへモッタイナイやうに思ひこませられてゐた。美男子で宮内省事務官といふと、まるで人種がちがふやうな気がしてゐた。話はすべて雲上人の秘事にわたることで、貧乏くさい文士や画家は半ばケイベツし半分はうらやましがつた。今は『渋柿』といふ俳諧雑誌を主宰し十徳かなんかをきて宗匠になりきつてござる。そのころからズーッと独身で押し通してゐるところ何か主義でもあるのか

しらん。

三重吉君がその隣にフロックを着て、東洋城が片手をかざしてゐる火鉢の前に、両膝をかかへながら片手を火鉢の上に出してゐる。三重吉君らしい無作法さだ。三重吉君とフロックは不似合のやうに思ふが、当時成田中学の先生に就任したてて、背広がないから誰かのものを借用に及んだか、或はもらつてきたものらしい。三重吉君は酔へば広島弁まるだしで、

「屁はショセン風ぢやけんのう、ヘ理窟はヨセヤイ。」

そんな調子で雲上人でも貴族院議員でも誰でもやつつける。酔へば誰かに当りちらさなきやおさまらない趣味なんだ。痛快なこともしばしば言つた。

三重吉君と東洋城との間にはさまつて、後に野上臼川君がゐる。野上君は額が少し禿げ上つてゐるが右横の方で綺麗に頭髪を分けてゐる。十弟子中一番癖のない温厚な紳士だ。三重吉や草平君か酔へば八重子夫人のことをガヤガヤとひやかしたり、羨ましがつたりしてゐた。

画中の右下の隅に春蘭の鉢植がおかれて、その横に黒猫がうづくまつてゐる。

森田草平君はその前に一人だけ片腕を組んで片方で煙草をふかしてゐる。森田君はそのころ天神髯を生やしてゐた。他の連中にくらべて老けてゐる。雷鳥女史とのゴタゴタのあつたあとて『煤煙』の構想を腹の中に考へてござる最中だつた。天真爛漫で三重吉君のやうに毒舌は吐かぬ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com